

変わりゆくもの、変わらないもの

佐々木 祥子

「竹の節の間には蜂蜜がたっぷり詰まっているらしいよ」何をどこで勘違いしたのか、子どもの私はそんな謎の情報を信じ、心ときめかせていた。蜂蜜狩りに行くことがもっか目標のひとつとなった。あの、甘くて飴色のとろろりとして妙に妖艶な雰囲気をもつ蜂蜜、それをたらふく食べるのだ!

「シー!お母さんには内緒だぞ!」と悪事を共有するように友達数人と近所の手頃な小山に繰り出し、蜂蜜狩りが本当に決行された。当時、私の家のまわりはまだまだ開拓されておらず空地が多かった。私たちはその中の竹藪になっている空地の小山を狙い、汗だくになりながら竹を確認してまわった。「もう狩られ尽くしているのだろうか?」探せど探せどすっからかんの竹ばかりだった。

目標を果たせず、肩を落とし、泣く泣く下山した小さな探検隊。大人になり、もちろん竹の中の蜂蜜なんて存在しないことを知るわけだが、あの時のドキドキや汗臭さ、友情、焼けた肌、ツクツクボウシの声、今も忘れることはできない。私のかげがえのない思い出だ。

それから時は経ち約三十年。私もすっかり大人になった。とある年のお盆に帰省をした際、ふとあの空地がどうなったか気になり、久しぶりに近所を散歩してみることにした。するとどうだろう、空地があった小山はすっかり開拓され、可愛らしい戸建群になっていた。殺風景だった場所が、カラフルな屋根や壁の明るい場所に変わり、子どもたちが賑やかに遊んでいる。私のノスタルジーは行き場を失った。

時代とともに変わりゆく土地。私が遊んでいた空地はなくなったけれど、姿を変えその土地は今の子どもたちの遊び場になっている。日に焼けて汗だくで遊ぶ子どもたち。きっとここはまたこの子たちのかげがえのない思い出の場所になるのだろう。

あの頃と変わらないツクツクボウシの声が聞こえた。